淡路常磐草　八

和書門　類　號　函　架　冊

内閣文庫　和書　類　號　冊　架　函

内閣文庫
番號　和　29327
冊數　8（8）
函號　176　1

地

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

常磐草目録

阿萬郷　湖崎浦　芳野浦
蔭葉社　沼島　磤馭盧島
島公方故居　廣田郷　岸河神社
鮎ノ谷ノ瀑布　大野驛　賀茂郷
賀茂神社　先山

日本政府図書

重修淡路常盤草巻之八

内 一〇七五四號

仲野安雄　著

三原

阿萬郷　和名類聚曰三原郡阿萬和名阿萬
按るに郡の南にあり郷廃して阿万西東村に名残す

上本庄村　支邑　阿内　佐野あり

本荘溪　新田の山間より出て伊賀野上本庄より
塩屋にいり西村川と合て海に入

亀岡山八幡祠　上本庄にあり社殿若干阿万郷中の
祭る所也里人謂てむかし海中より亀に乗て

尋況すといふ
按するに證傳なるへし武家託世以来所在地所
の士猶舎露国に撲徹して亀岡と名けたる之社
地に宗亀甲玄武の象あり神庫に奉納の佛經多
し華厳経五十七巻大集経三十巻涅槃経三十
九巻般若経三十一巻日月藏経二十一巻法華経
七巻梵網経一巻瓔珞本業経二巻像法決疑
経一巻観普賢経一巻無量義経一巻已上十
部百九十一巻一函に入函に記して曰元亨
四年甲子五月十四日奉入之願主淡路大夫

判官入道沙弥寂建とあり又法華経八巻観普
賢経一巻無量義経一巻右三部紺紙金泥一函に
入函に記して曰永享八年丙辰卯月奉寄捨河
内本庄八幡宮沼嶋住人梶原越前守平俊景と
あり又大般若経函に記して曰宝徳二年庚午
卯月願主橘正時藤原久長和田守長宥実宥傳
とあり
此條村の中に河内社武蔵社なとあり

神宮寺
同しく亀岡の下にあり真言宗 高野谷光滝末寺
除若丁

清瀧寺　在所く同し　同上

観音堂　同し処にあり三十三所の第九之

萬勝寺　同しく真言宗

毘沙門堂　同し村菅原山にあり施主平塩物兼友
　佛工善慶作といふ

庵ノ手坊　同しく河内にあり

古塁　同村の北の山にあり何某の時営様を
しや志ゝに思兎の説に細川左四郎居城といひ
傳ふ一説には細川丹後守の子備前守相続て居
在しといふ

按するに菅笠屋形感春も初ハ左四郎と称し
原家に見へたり何方より出し氏族なるへし備前
守沼鳴梶原ゟ為に害せられしといふ伝説ハ郷殿
の條に記たり思ふに細川氏守護職たる時に何
方より氏族居住して此許にありしなるへし應仁乱
後より争戦絶さりしに三好氏起りてより阿波
の細川氏ハみな清聯せり沼鳴梶原も三好に与力
せしなるへし

因に記す阿万ハむかしより武人の多く住をし処
とみ当家手記に何方志和の人々ありて何某

六郎なりしか共に伍せしにや平家物語九卷曰所
波国住人安摩六郎忠景是も平家を背て源氏
に心を通しけるか大船二艘に兵粮米積物具
入けるを指て上りけるを能登殿福良にて此由を
聞給ひて追かけ給ふ安摩六郎叶ふましとや思
けん和泉国吹飯浦に楯籠る紀伊国住人園
部兵衛忠康ひとつに籠りし城を構て待所に
能登殿推寄て攻給へハ安摩園部か叶ハて逃
て京へ上る
讃岐實記に琵琶法師伝ふ司にて淡路国人
安摩六郎宗益と云ふ忠康ハ重茂に作る
太平記巻十七曰延元年中山門にあり阿波
淡路の兵阿万志知小笠原の人々三千余騎を
率て加りしかハ諸人志強くなり又巻二十二暦應三
年四月脇屋義助勅を奉りて伊豫に下向し四
国西国の大将となる義助吉野を発して紀伊国
にいたる時熊野の人々淡路の兵船を調て義助を
淡路武島に迎へ安間志知小笠原一族城を武
島に構へしか又兵船三百余艘を調て
義助を備前児島に送る

下本庄村

櫻井　下本庄医王堂前にある清水

塩屋村　支邑佐野弥生あり

潟田　塩屋村にて座主開作(ヒカタ)あり其手海時に大なる水閘を造りて潮を防て田となしぬ

光明寺　塩屋にあり真言宗　高野山発光院末　下に弥陀安阿弥作とぞ

吹上村

田尻湊　吹上の西の松嶋福良港口の東之鮑の鰭の濱あり吹上塩屋の海濱　白砂青松京佳之節(ヨコ)

生濱と云

阿万西村

西村川　上本庄の奥より出て下本庄を経て西村より海に入

阿万東村

東村濱(カハ)　東村の奥中河内より出て村西より海に入

妙観寺　東村にあり真言宗　高野山発光院末　菜河衛門某作云

中河内　同村東にあり是より土生へ越る嶺道あり

菁草(キクサ)嶺と云

仁比村　是より以下を下灘と云　按子仁比(ニヒ)八冊比の粘泥名丹比(タニヒ)とぞ書きを考刊左子誤れるなるべし

粉濱　仁比村より阿万東村の間北海へ出るみさきの
接する所山家集に出る沙濱なるべし西行法師淡路の
南の海辺を経過すとて撰集抄よりみえたり　在原
の詠なるべし
山家集　西行法師　小鯛引網のうけ縄をくり
かへしつらしわさなる沙濱に
地野村　芳地の端文なるべし
土生村　沿海へ渡る家あり　支邑大川あり
志観寺　土生にあり真言宗 高野末 行基開基行基菩薩作
像行基作と云

高见山観音堂　同く界内にあり三十三所の第七之
城方村　本村より國実拂川油谷三村を隔て上城
方あり城方の支邑なり
高岸社　城方にあり社号不可
国実村
拂川村　桜川の端文なるべし　桜渓　嶺より出て海に入
油谷村　柚谷の端詫なるべし
油谷渓　山間より出て海に入
一宮二宮妙見社　油谷にあり
長谷寺　ともしく真言宗 仁和寺末

山本村

吉野村

四社明神社　吉雅ともあり

芳野浦　即吉野村なり按するに撰集抄に藤野
浦とある藤の字ハ芳の誤なり藤雅と云名の似たるより
むつましくてたどるし羅るあり紛るゝ藤野の名
さのミ雅名にもあらねバ芳野ハ古の名所にて其名の
聞えきを慕ひてえぞ書しなるべし今の吉野村の事
なるべし今の吉野村より熊川村黒岩村迄續にて元
吉野あり即今の吉野村の支村也元吉野ハ大嶽なる

と云所ありむかし大和の芳野を模したる所といふ
撰集抄 巻四 西行法師作 曰以往淡路をさ志ざして徘徊し
侍りしにまかりてハ古き跡ありき侍りしに藤野の
浦と云所侍り前ハ南向の海漫々として際はてなし
後ハ山けはしく今にさびしき所侍りなきさ
にそひてひろひつとまありて彼所にハいつり侍りしなかに
ある人のかたらふ浦をも侍らず志かあらずとも藤野と云
名のゆゑとなくむつましく覚て侍りしかば名どるし
罷りて侍しにあやしくあさましき庵のやうに延びたる
侍りけるがおかしく見て侍りしかば庵の主ハ五之ほ

ハて雲深の叢詠と祝とはかりみへ侍るなる枝に
北嶺禅閣大僧正明雲実也と被書侍さて八此所ニ
住給ふ世のおハしまするよし哀に覚へをほへくするに
法のともち侍さいよ〳〵此所を出給ひしより幾年ハ了そ祝
叢詠とはのこしときていまそかゝるらむと思侍しに其
日の仏まて侍しに夕ニ来て僧正山の上よりいまそかり山
桜の花をとらむと手折給ひて奉り給へりこはいかに
とて何こして給ひたるそや姫のかさに何わさのある此
叢ニ侍るむとすそ思ひより左道との給ハ侍しにちぶる
十まんれとよはす随喜の涙をせきかねて侍其夜ハ

法庵の侍りて侍て何となく述懐とも申出て一生に袖を
志侍りて近江の縁にも侍らさりしかハ法く言まて侍りき
出家せしも用ゐ玉寺わすれやもとて、して侍てよろつ執務
していふそかりしかハさきにハいまそかりしとも大方に
てすそいまそかるらめわきて身にも心まてハ後の世気
事思ひ入給をしと此日にハ思事かし侍り乞事法
境ともとそ縁しきわきまへるへしけに何とやらむ高
住よ暴りならん人ハいかにも情のわりなく候心あると
思いますそとよ
按するに明雲僧正ハ久我大政大臣源雅実孫顕

通ノ子なり梶井殿九世天台座主と成る蓋当時平
家の乱を避て淡路国に隠れし成るへし寿永二年
木曽義仲一乱の時法住寺仙洞に伺候しける中り
て死去し事蓋裏記にみへしより徳統草にも此僧の乱
事あり詠歌ハ千載集に載しより西行ハ鳥羽院下当
佐藤兵衛尉能清なり保延三年八月出家して円位
と称し後に西行と改たり出家の後諸国を修行す

吉野浜　浮山より出て吉野の海に入

惣川村

惣浜　浮山より出て海に入

黒岩村　海畔に黒色の大石羅立を因て名とく

地蔵寺　黒岩にあり真言宗　高野印徳聚院末

神仙寺観音堂同し村譲葉社界内にあり三十三所
の第八之

譲葉山　同し村の北にあり南海に臨める高山
なり山に弓絃葉権現社あり国君より営建の所也
賀集山古記に弓絃葉権現とて神楽の法会有し
事見へしより昔ハ譲葉の歌とて大饗ありし事
なといひ伝ふ

大永六年沙門宥尊所記諭鶴羽山再興募縁疏

曰淡州諭鶴羽山元曰多々𫝶峯人王九代之時
天竺摩迦陀国神衆鶴羽来止此山因名諭鶴羽
山権現天智之朝播日本無双之嘉名天暦之年
振夷狄降伏之霊威云云（下界、此疏所蔵於賀集山護国寺）
按するに神衆鶴羽来る因て名くといふ諭鶴羽
の字義むつかし但し山にゆつり葉の樹多し因
て名をゆつりはといへし天智の嘉名天暦の霊威
いまた考へず

康正二年丙子諭鶴羽山註文曰、一證誠大菩薩（一社二間一面）
二両所権現（一社三間一面）三若宮王子（一社二間一面）四、
五躰王子（一社五間二面）五、四所明神（四間二面）六、滿山護法
（一社）七、地主神（一社）八、護法神社（一社）九、常行堂（一宇三間四面）十、
經藏一宇（三間四面）十一、長床（一宇七間四面）十二、舞殿（一宇五間四面）
十三、鐘樓（一宇二蓋）十四、太門（一宇二蓋）十五、三面廊并渡
廊、十六、不斷如法道場（一宇三間四面）十七、金堂（一宇七間四面）十
八、湯室（一宇三間四面）已上十八宇
按するに諸社道場みな廃して今本社　数あり
界内に古石碑多し文字漫滅してみえず
又按するに祭神は熊野と同神といふ然らは伊
弉冊尊を祭ると記し神社考啓蒙等に八伊弉冊

当事觧男速玉男と所謂熊野三社と云　日本
紀曰伊奘冉尊生火神時被灼而神退矣故葬於
紀伊国熊野村又曰伊奘諾尊与伊奘冉尊盟之
所唾之神号曰速玉之男次掃之神号泉津事解
男凡二神、延喜式曰紀伊国牟婁郡熊野早玉神
社あれともゝの説熊野の神なるへし天竺神とハ習合
家説なるへし　諸神本懐集曰天竺摩訶陀国
王百襁本国而投五劔於東誓曰宜止于我有縁
之地其五劔分飛止于紀伊国牟婁郡下野国日
光山出羽国石城郡淡路国諭鶴羽峯豊前国彦
山等之五處矣其佁降時之形者五處或長三尺
六寸八角之水精也九州仰之霊験萬人致信服茲
紀伊国岩田河許有一猟人阿刀千世者一日入
山射一熊而追血痕行則所従犬見楠樹梢而頻
吠千世擡頭見則三躰之月輪輝于梢上矣千世
問曰未審天変乎妖光乎何故有三月輪耶月輪
答曰非天変妖光我為救東土衆生従西天佛生
国飛来而欲成熊野三所権現汝速造殿而可崇
我乃千世拜伏造假殿奉遷今熊野三所権現是
也

按するに諸社本縁集八幡源空か示作是本朝年
四社九所の中にありと云りやとらす近世文
俗等此妖僧か舊事大成経と云ものを作りて
梓行す偽書なりとて絶板ありしなり今もその
古写本世にのこりて秘蔵する人あり書中に弓
絃羽此事あり偽書の云說すへからさるといへとも猶
くわしく筆記す

云書曰神武天皇丙寅木曾国言熊野山之曲有
熊野血伐狭田命者矣常事好狩遊時見長度一
丈之大熊即放大箭射之熊不瞋負其箭而入深
山乃尋血跡晩至大湯原峯爰有三株櫟木大熊
死於樹根血伐狭田命至此驚光輝見月輪於樹
上其面高量五尋奉問在月汝高尊神何為離於
天居於樹上哉答曰吾者天神高皇産霊尊也降
在日波方大国雪降山魂形為玉也住八十萬歳
成一角既而八角成畢云何然哉八極数成人機
依八極故数成八角今吾孫天與吾尊奉祭念懇
也故移于豊国日子山之巓其魂形玉八角八尋
住十五歳又移於淡路国弓弦羽峯住之而住十
六年移木曾国露月山松下又住八年遂遷于茲

留𪾢樹枝今亦三年汝速至帝都奏天皇木
脊穗積祖血伐桵田命驚走忽奏之天皇大悦勅
天村雲命遣於築石令問其事国民答曰昔於日
子峯有天降神其神形体者竪横五六尋八角
五光真玉石也人欲奉親倚即吐血熱悩然数年
在後更無也尋至淡路又問其事国民答曰昔日
見長二丈八角白玉石神降於弓弦羽嶽昼夜光
輝其験行祈願無不應飛去東方今不知在處天
村雲命帰洛答奏天皇大悦重詔天村雲命添血
伐桵田命遣之見之又増二輪以三輪在時月輪詔

二輪去来諾尊並去来冊尊也従本在茲吾三柱
神天皇皇祖吾在常世国名声随耳尊身一有多
形待天地成開而出成功施徳而已去来諾尊陽
氣大主去来冊尊陰氣大主高皇産霊尊陰陽相
和主天地万物此国他国皆無不依吾有従無不
蒙我助我今見出永留居茲天皇万庶発信参来
無不満祈吾祠八棟造十三所十二前天神七代
地神五代天地人主請募垂跡依高皇産霊尊奉
鎮坐于本宮并去来冊尊奉鎮于新宮并去来諾
尊奉鎮於西宮于下津磐根宮柱太敷立于高天

原梁材高知奉崇高津祖宗宮之大神天下元鎮
也是此十二所大神天七代地五代也本宮西来
神勧之新宮泉来神勧之結宮諸神自集来更非
人能本宮十二前是師道七代西来為正殿並本
主五代海形雄神嫡子嫡孫海形日神少彦名是
新宮十二前是二帝五后泉来為正殿産生三神
大国魂神久延彦神結宮十二是王道七代大祖
為正殿並海形日神室作五代也天皇大崇之直
至而祭之毎月遣使奉幣祭之
按するに本懐大成の説おかしき事同しといへとも

大成に至りて八吉皇諾冊三神を以て熊野三所に配
し声随耳尊を説出して観世音とあらはし那智山を本
地の垂迹と定むる間[illegible]由すく巧なると見つへしる
弦羽山に大悲堂あるも又熊野を模せるなり
白浜村　白浜本川の子破傍の路寄するにありて
りり人なやめり
白浜渓　後山より出て海に入
大浜社　白浜にあり
本川村　垢離川の時文まや俗に水に浴して身を清
むと垢離とを後河と同義なるへし訓をきと以て

来川といへる也
仁比より来川まで十三村三原郡に隷して灘といふ
畑田より東三村津名郡に隷して上灘といふに對す
来川より淡山の嶺を踰ゆ是ハ志賀郷の成相谷に出畑
田より淡山の嶺を越ゆ是ハ廣田郷の鮎谷に出志賀を
廣田ハむかし津名三原両郡堺なる由今ハ分てるなり
上下南津の村里田園多く男ハ耕種をつとめ婦ハ女功を
事とし唯薪を樵て治生とす山民淡漫深谷に住て樵
採獵漁を伍とし本郡中原の郷邑に至て曳子風俗も亦
自ら同しからず目淡に（十三）出といへる里人集りかけ

沼島浦

ありく祖父弟ふ々戯遊るといふ又元服の时烏帽親を
とりてこの地の社前に行く加冠の前様の擬するハ誰と定
問ふ冠者曰何某と答ふ元服をとらふと前摘を抜とる椅子
孫をつけて冠者に盃を加へて曰寿額（カウ）ありてつとめよと父
とり親友酒をみかけして帰るといふ當世冠礼廢しき
に僻地に猶古式遺れるなめし

沼島浦　南洋の海中に土生を距こと一里半にあり淡の南
四二里許西北に淡商の家邑浦々小舟を泊りといふ船を泊す
所あり島を流はいふ魚蝦多し或ハ伊勢北海對馬の海
行て漁猟する者あり沼島と云ふまた武猟とさるハ漁獵

国立公文書館
National Archives of Japan

壱刊ときを以て兆しあるも紀貫之土佐日記に阿波のみ
ちをわたりてきたるうのさと紀をうりに出しまとしるしたる
とすきてとある八町廿把なり

萬葉集 巻三 羈旅歌 柿本朝臣人麿

三津埼 浪手恐 隠江乃 舟榜

みつのさきなみをかしこみこもり江の舟こく

公 宣奴島尓

きみかゆくへのぬしまに

按するに三津ノ崎八樗津にあり
隠江ハ曲江ありは津の彼のあたりき

と詠きて隠江の舟あき出つゝ奴島をや
君かけらんいとをしと詠りを慰さむるは

名勝詩集 阿波津田八景 中沼島帰帆 頼寛 一島

煙晴七里東帰帆 郤勝昼図中瀟湘遠浦甲天下
添得鳴門白浪洪

磤馭盧島

今沼島と称する八即をのころ島なり 考證左ニ記ス

日本紀曰伊弉諾尊伊弉冊尊天浮橋の上ニ立て
共ニ計て曰底下ニ国なからむやとおもひてすなはち
天の瓊矛をもて指下して探りたまひしハあをうなはらを獲たまふ
その矛の先より滴瀝る潮凝りて一の島となれり名
なつけて磤馭盧島といふ二神ここに彼島に降居して
共為夫婦して洲国を生んとほしす故に磤馭盧島
をもて国の中の柱として陽神ハ左より旋り陰神ハ右より

換りて同しく一西に寄ところなりき
按するに瓊矛ハ神代巻小註に瓊ハ玉也此曰努とあり努の
吾音ぬなり古事記にハ沼矛とかけりとぞことさむハ淤能
古ろとのころしおもいはしと沼矛の滴凝りてなれる嶋之を
説と取りぬかこの嶋とよつきと省きてはしまりて後世に名つけ
しなるべし
釋日本紀ニ引公望私記曰問此島有何意名之乎
答是自凝之島也猶言自凝也今見在淡路島西
南角小島是也云俗猶存其名也
按するに西南ノ角とは説多くたがへとも沼嶋ハ国の南にあり

俗猶存其名とあり此ハ公望のいまてハそのころ嶋をよく
知りたる人ありしなり
釈紀又曰或説今在淡路国東由良驛下又曰或
説云淡路紀伊両国之境由理驛之西方小島云
云然而彼淡路坤方小島云今渇其名也
按するに由良驛延喜式に見えたり南海道の渡口にて
紀伊国に往し由良驛の下五里許り西に沼嶋あり由理ハ
由良の訛なり
古事記仁徳天皇紀曰天皇聞看吉備海部直之
女名黒日売其容姿端正喚上而使也然畏其大

后之嫉逃下本国云云於是天皇恋其黒日賣欺
大后曰欲見淡道島而幸行之時坐淡路島遥望(ホセリテ)
歌曰(ミウタニ)
於志氐流夜那尓波能佐岐由伊傳多氐和賀久迩見礼婆阿波志摩
おしてるや。なにはのさきゆ。いでたちて。わがくにみれば。あはしま
淤能碁呂志摩阿遲摩佐能志麻母美由佐氣都志摩美由
おのころしま。あちまさのしまもみゆ。さきつしまみゆ
按するに由良ノ驛と紀伊国との間の海中に伴ヶ島あり
伴ヶ島の向ふの淡島に海部郡かたの淡島社あり此社舊(モト)
伴ヶ島にありといふ然ハ伴ヶ島の舊名淡島なるへし此社家

難波の津より出立ましひて津ヶ島より淡路島をかけて見渡したまひ
玉津の島々を眺(ナガメ)たまふなり伴島淡路島の間近く見えわたさる〻
所なり　釋契沖ヶ厚顔抄に粟島紀伊にありとのこころ
淡日本紀私記にも此望り記しある説ハ今の淡島と能叶ぬ故に
淡も淡路坤方の島に御覧にかなはぬよませらるへきにあ
らす粟島に津寺ての説ハせしま是ハ二の或説の中に云ふある
へしとあり
按するに空淡道島遥望歌とあるハ淡路に渉ゆきの舟行の
中まての吟詠なるへけれハ坤方此島々まて御覧に入ましきに
似らす淡島ハ粟島ともに只淡路の南方面の遥ハ心御覧ある

へきなり　文章彭抄にあちまさのしまの日本紀人の名に
檳榔とあちまさと点せり檳榔島の名は少しも名をかへたる
なるべしさきつしまは浪の浮ちることあり。按するに淡路
のことにや　日本紀纂疏曰磤馭盧嶋舊説和州
之宝山也一曰江州之膚山也なとあるは神紀の文
義にはたかひ之藻塩草にもあはぢしまは淡路の異名之
とあるも非之幡多郷にあるをあはぢしま淡路の名を假したる之
明玉集（夫木集）中宗仲光　うなつやあはぢしまのある
はなれてわたすなるきたみそなし[illegible]
秀枕名寄　藤波　[illegible]とあはぢしまによせまして

かみそちかく国をうめ玉ふは
按するになりましてなりませるの字誤にや
奇白　あさひね榊（チハヤ）ありけれともなしたまふ　三千風
流河（ナガレカワ）　同じく浦の南溪より出て海に入
天神祠　同じく大寺の森にあり星人天満天神と称ス
按するに天神社は諸神にはあらず自凝嶋の説によりて
黄人諾冊二神を祭りて天神と云るなるべし文紀に一
書に二神降居彼嶋化作八尋之殿とありその八尋
殿に擬せるにやあらん
八幡祠　同じ浦にあり社領若干　上宗簡（ムナフダ）に天文二年

癸巳大檀那梶原景時とあり又一所に天正八年庚辰
大檀那梶原秀景とあり
神宮寺 竜灯山 同浦にあり真言宗 仁和寺末 大日像恵心作と云
西光寺 海照山 同浦浄土宗 知恩院末 阿弥陀像海中より出現と
いふ 右此大寺より移しける寺と云
蓮光寺 同浦浄土真宗 佛光寺末
釼音堂 同浦にあり三十三所の第十六なり
平波信 同じく浦の南の磯の海中にある大石なり長
四十丈廣廿十四五丈石面平坦なり毎年六月三日海
神と此嶋よりて祭る神楽讀經あり府一急浪より

此嶋上に遊ぶ必寄まれる事ありといふ磯に岩ある
石を方言に波信といふ
上立神 同じく平波信の北の磯より海中にある石の名
高さ十餘丈ある奇石なり黄金して柱のかし
下立神 同じく平波信の西南の磯の海中にありて高
さ丈許の石なり柱のかく梗立る
按するに立神と称し来れる高きを考るに是又
神紀の言によりて名けしなるにや
神代巻曰云云磤馭盧嶋二神於是降居彼嶋云
云便以磤馭盧嶋為国中之柱而陽神左旋陰神

右旋一分巡国柱 又一書曰二神降居彼島化作
八尋之殿又化竪天柱云云即将巡天柱
屏風巖 縦横數十丈の石崖屏風を立たるか如し佛
堂或ハ金華嵓ともいふ半腹に緑青を生して奇彩すなり
如し崖下を岸の海ふく穢ク 洞穴ありて尤深し其
辺の岩陰に大小の奇岩数ふべし 烏帽岩 蟇
波恵 鎧波恵 貝足波恵 蘂波恵 薬研波恵 屋形波恵 形
似を以て名付 波恵 麹塵波恵 青波恵ハ色をいふ
又鏡石ハ 方丈許の白石 滑にして鏡乃如し其の
清きを賞でいふとぞ

又温石溪間にあり焼て痛所をあたゝめ服して砭さ
し嬉しむ 石名とす 又氷柱石あり形似たり
廃大寺址
寺ケ原村にあり舊天神社界内に寺ありて雲
寺と称す今大寺森あり里人祝に尊に良王の跡清息
所浦流ゝ漂流せしと浦人のいひつきて大寺に存し所く
まいらせし清名あり清息所の腰掛石と云ふ所にあり
太平記八巻十四回 一ノ宮土佐の畑へ流され給し其清息所
ハ時ある事なりける 都をさへ流させ給ふ 高山を隔てて生に吹の
音信とゝに絶きぬとりてなも其の時の清才北巣比ゆる
ありけり 嘆ゆかぬに又清息所のいひ名残を足や浪と覚え

晴るゝ方もなくさゝ御歎喩へていはん方もなし此有様の
痛しさを見奉り此頃土佐国に有ける有井庄司何ゝ
若しくはへき御息所を尋ねて御側へ入まいらせんとて
細々に沙汰し参らせけれは宮限なく嬉しと思召只一人召
仕ける右衛門府生秦武文と申す随身を御使に
京へ上せらる武文急き京都へ上り隠家の奥深草の里に
隠させおはしまするを尋ね参りつゝ迎へ参らせ先尼崎
まで下し参らせて渡海の順風をそ待ち居たりける頃
折節筑紫人に松浦五郎と云ける武士此浦に風を
待て居たりけるか此御息所の御形を墻の隙より見参らせ

て兼てひたすらにやと思ひける程に深(フケ)て人定(シヅマ)る體
に其夜は松浦か郎等三十余人物具ひしと堅
めて續(タイ)松に火を立して蔀遣戸を蹴破り前後より
打かくる武文は強盗入たりと心得て枕に立たる太刀
をつ取て中門に走り出入敵三人を切伏より松浦か
郎等武文に切立られ傍なる在家に火をかけて喚(ヲメキ)て
そ攻たりける武文心は武なれとも防へき様なく先御
息所を掻負向ふ敵を打拂ふて湊なる舟を招(?)行
なる私舟もあれ一女性暫の程乗せてたまはれと叫(?)く
汀に立たりける船しもこそ多かるに松浦か乗舟(?)

濡衣なれハ武文泣く座形の内におゐてなる松浦
ハ適我舟に女房の乗たる事を悦ひて既春腐ゐ
旅人皆此舟に乗て陬の澳に漕出し武文討すと
ともに招とも見も入す心息所ハ其處の死して浪沈
をする松浦免角慰むとも帆を下すも日を経程
平阿波鳴門を通る所に俄に風替り逆向く此船
行やらす櫓を船底より逗おち此海波之中ハ龍宮
城の東門に当て此所ふても諸神の給ひしとせらる
物を海へ沈めなくは上﨟を沈て而後人の命を助よと
なくなく松浦も情なき田舎人なれハさてハ命を助る

とて小舟一艘引下ろし女房一人と水主を乗せて
波の上に突放す松浦か舟ハ西をさして行衛波路
風に吹れハ淡路島かの小船に乗せたる水主も早疲しく
船を漕寄て淡路の武島と云所へ漕着て此島
の体をみて一里に足ぬ所なれは海士の
家あつてハ住人目なき浦なれハ様あはれなる草の
庵の屋根藻塩垂く栖（スミカ）に入て世々の涙の袖をしほり
つゝ今年ハ此事を弟にも知らすハ小手故事起て六波羅
攝津九国北国の武士たりしかハ先帝ハ隠岐へ
第二宮ハ土佐の畑より移され帥宮ハ惟

是所の今世に生ぬるを歎思ひける所に淡路の武
家にて生まれて後は先人と隠に過ぎし道
都へ帰ることを許さるなくて其中一つの事ありて一宮は数年に
御自害ありし後是所は御思ひのつもりにや御中陰の数日をと
おもひさるにぞのみこりせなり
推するに一宮は尊良親王の御事にて後醍醐
天皇第一の皇子也此是所は洞院大臣
公賢の女なり秋ることを異説あり
増鏡 藤原良基作 日中勢宮 尊良は元成 柿の詩にあるにけれど
みかど 後醍醐 摘れまふ のかくれさせたまひぬれば今はかひなしとて

うれしそう人をのれく作には若宮時信と宮
の家にわたりまれぬつまくとすのあまかしみしるとより
我のまるし
よのうさをきにも思ひや神無月とかいふ頃ころはこれなか
洲にて子あそ 若宮ささと 之 卷大納言為世の孫にて其の孫に
後家に常為後の仏し大納言為世す為の女大納言西園
言 叙母 のとありけるに後洗しつまそ乙女は後に姫君とな
にてきなへて又中宮の御匣殿は宮の御世ちとの大太臣
公顕の御女なり此御殿にも男女子などおはしし御子は
中にもあるもぬるかはそとこれにもかくすぐるみまかく

異れきこと伝るにかくあさましきことのみてきぬ性
ならし異なるはくし人かずならず道理はせなれしかは
洲しるハたゞ此奥伝君とのこと又なきすみに見てかくし
清り不唯かぞ風も宮かき有とにおもすれとも封無ハ異
ことゝす

按ずるに堺説の説にては此丹形ハ言にさ記しとして死し
なる人の魂説ハ古来記ハ妄説なり桓武天皇の御時不被肉
就其淡路に流され適ひしとあり若ハ此淡路に在るも
留まるをば丹形のやうに讃り伝へしにや淡路にて
古来記の説にて此丹形の居所何とも定めて伝へしなるべし

当国ハ不破女王の事ともせずと云へ
又淡路に武治女郎と名付し魚あり里俗伝説に
昔良王の此島不淡路にあること三年の後京より
迎ひける此時浪風に隔（ヘダチ）られて舟を発（イダ）すことを得ず法
良所思へらく海神我が姿色を惜みて留（トム）るにこそと
自ら醜（ウルハシ）き顔を描（エガキ）て海に投しぬ是形悉（ミミク）して探
見るさ洋と来しとなりされより風和して舟出して其魚
像化して異となる是を淡路女郎といふ他所にハ見ぬ
魚なりと

按ずるに此魚淡路に多きものなるハ何とか名付

あり魚の形ハ頭大にして鰓あり藻伏といふ魚に似たり
又紫菜(アマノリ)を細に碎き薄くして干たるを沼島苔(ノリ)と
いひ又神仙苔(ノリ)ともいふ和名抄に阿末乃里を神仙菜
とかけれハなるべし

古壘 沼島浦の北に沼島の尾崎にあり今多くハ
畠となれり

太平記 巻二十二 脇屋刑部卿義助暦応三年四月南朝
の勅命を蒙り四国西国の大将を奉して伊予国に下向
す紀州田辺宿より熊野人とも兵船を調へ淡路の
武島へ着けるに爰に安宅志知小笠原の一族共

宮方にて城を構へて居たりしかハ船を湊に出して迎
へして三百餘艘の舟を揃へ備を見へ送り奉る
操するに阿万志知の人々猶も沼島に田坐柵を構ふる
まや此時篠原の時より阿波淡路の守護職たりし
小笠原氏に従属しける兵士も従いまさず者に至りて
皆軍を揚げて北軍を防禦せしこと其後左京将軍
より細川淡路守師氏を下して淡路の国の守護職とす師氏
国中を征伐して本治せしこと少也加集山に細川の時の
名簿の中に梶原平三郎あり梶原氏ハ沼島に在住
せしなるべし永享中沼島住人梶原越前守本領家

あり阿方ハ讃州細川の管領にてありしに大永享禄
に至て三好氏自権を握りて威名を振ひ永禄の始
管領細川氏をも殺害せしより阿方ハ細川も梶原
氏の為に害に遭ひ又は梶原の手にかゝり梶原
氏は三好ニ与力せしに依りて天文に梶原京兆天
正に梶原秀京阿波ハ讃岐の梶原に任す天正九年
豊臣秀吉阿波征伐に当りて梶原氏の家廣世
なりし

當公方

管領記曰大永元年三月廿日公方義植細川高国
室町の将軍源義植なり

江州木和にありて京を出させ淡路の武島
へ渡海ありけれハ京にハ細川右京大夫七月
六日播磨より義晴上洛ありて京都将軍家
譜曰源義植初名ハ義材（キ）中比義尹（タヾ）とし後に
義植（タネ）と改む　任職四年再任十四年　父ハ義視　子義敏　延徳元年
義政義尚の早世有し故に義視をよびて義稙義
材を伴ひて美濃より上京し同年ハ義政義材を
嗣いで子とせり同二年七月義材従四位下右近
衛中将となり禁色を許され征夷大将軍に任し宜
下ありて参議に任す明應二年二月畠山尾張

政長義材を供奉して河内に発向し畠山治部少
輔義豊を攻とり義豊義就子ハ誉田に屯す義材ハ
正覚寺に陣し誉(コンダ)田を攻ましむ利あらし四月
廿二日義豊兵を率て正覚寺を攻とり細川政元
義豊を救ふへしかハ遂に正覚寺を攻破り政長討死す
政元義材を執(トラ)へてその家人物部紀伊守か宅に置し
く六月義材夜潜(ヒソカ)に逃出て越中に奔りその後周
防に赴き大内義興を頼みて許かくて文亀元年義材
諱職を罷(ヤメ)て名を義尹(タヽ)と改む義尹周防に在て
九国の武士等に檄書を遣して振ふ懐旧時に将軍義澄

永正五年大内介多々良義興義尹を供奉して
周防より上京す四月九日細川右京大夫澄元没
落し十六日将軍義澄近江に出奔す廿七日義尹
和泉の堺に着て六月八日義興ともに京に入りて
同十二月義尹将軍従二位に叙し十九日始て出座し
此時ハ諸大名太刀を献して賀奉りし八年八月義澄近
江にて薨しぬ同月細川政賢兵を起して京に
入しかハ義尹及ひ義興ハ丹波に奔りぬされと頓
丹波より兵を率て京に入舟岡山にて合戦して大に
勝ち政賢ハ討死せり九月義尹京に帰る同九年

義幸ハ京に向て同十一年三月義幸甲賀山中に
出奔して六月京に帰り名を義植と改む後又源
氏長者淳和奨学両院別当に補す大永元年
三月廿五日義植ハ京を去りて淡路に出奔し阿波に
移る 十二月廿五日将軍職を罷られ同三年四月前将
軍源義植阿波国撫養にて薨しぬ 恵林院巌山
道舜と号す天文四年太政大臣従一位を贈らる
按するに初ハ細川及三好等将軍義澄に党して
義植及義興と敵たりし 其後とも義植細川高国と不
和になり 細川ハ三好と高国と不和なる也ハ洲崎にあり

細川三好をたよりて淡路へ来り給ふ所あるべし 淡路
に寓居し給ふ也へ島公方といひ奉りし
後太平記曰義植嫡子義冬ハ淡路へ後に阿波
の公方に居玉
按するに義冬ハ阿波細川屋形の姻族なれハ義植薨
去の後嗣下して阿波の平島に居り其子孫平島殿
といひし今にあり

廣田郷　和名類聚曰津名郡廣田和名比路多
按するに今三原郡に隷して郷廃して廣田宮村等
の名遺る古へ山河を隔て国郡を並かひしに廣

田郷と当宮郷とハ一山荘を隔て両郡分界の野あり
あり廣田の津名に隷るとさなり
東鑑 巻三 曰壽永三年四月廿八日丙申平氏在西
国之由風聞仍被遣軍兵為征罰無事御祈祷以
淡路国廣田庄被寄附廣田社其御下文付前斎
院次官親能上洛便宜可被遣神祇伯仲資王云
云

寄進

廣田社神領事

在淡路国廣田領一所

右為増神威殊存祈祷寄進如件

壽永三年四月廿八日

正四位下源朝臣

按するに源氏より平家の中淡路廣田の
庄田を摂津国廣田社へ寄進せられし是ハ平家
追討の軍中祈祷の為なりと下文と見ゆるよ
ある神祇伯白河殿へ遣されし廣田社其延喜式
摂津国武庫郡廣田社とあり日本紀ニ天照大神
荒魂といへり後世二十二社の中なり仲資王ハ白
河第四宮を考ふるに花山院皇子清仁親王の後流
にて神祇伯ニ三位となる故に神祇のかミと崇む

国々下文を遣ハサレし之殊に卅人廣田社を崇敬
させられしかや廣田社奉納和哥なと無行せらる
其しや系圖 華山院 六十五世 清仁親王 延信王
廣資王 顕康 祖白 顕廣王 仲資王 神祇伯 源朝
旨ハ頼朝之本書にハ草名あるへし
東鑑又曰十月廿七日 淡路国廣田荘者先日被
寄附廣田社之處梶原平三景時為追討平氏當
時在彼国之間即従等乱入彼庄妨乃貢欲仍仲
資王被申子細更非改変儀且可下知景時之由
今日被遣御報

又 巻十曰建久元年庚戌四月十九日壬寅造大神
宮役夫工米地頭未済事有職事春書神宮使又
參訴之間可致不日沙汰之旨下知給於有子細
所々者今日令注進京都云云淡路国廣田郷下
知大和前司重弘其狀相副之
按するに重弘廿二日乙丑為使上京とあり以上
ハ廣田庄を廣田郷八幡宮へ寄進ありしと云
る人ある故に廣田社様津邑にあるにとあるし
淳貢
綱村 一

岸河　奥畑より出て上内膳を経て鈎村の岸河
に至りて鮎谷川の下流に入

岸河神社　鈎の支邑岸河にあり鳥地は岸河人家
の側岸河東にあり今岸河の南に小丘山ありて
山上に社あり後世岸河神社と称するは今山王権
現と称す当ハ祈年国幣に預り乃神之

延喜式曰淡路国津名郡岸河神社

按するに廣田郷舊津名郡之今三原郡に隷せり

準胝堂廃址　鈎の岸河の路の下田良岩屋去道の
かたはらにありし跡なる之下此記堂と云ふハ堪なる之し

山添村　山傍の地を文添傍訓通するは郷の西山に傍ふ

古塁　山添にあり城主氏といふ詳ならず

古塁　同し村和にあり詳ならず

廣田宮村　郷の西山下にあり八幡宮あるゆゑに名く

宮村河　宮村山添の間より中筋川に入

廣田池　宮村の南にあり大池と称す

宮村池　同しく西にあり

八幡祠　同し村にあり封田若干廣田郷祭る所之

大宮寺（廣林山）　同し村にあり真言宗大覚寺末

廣田清水　同しく官道の傍にあり名水なり今ハ切てみえぬ

釜ヶ淵　一ノ村より香文ニ越る渓間　小瀑布あり

石塁　同しく西南の山ニあり車路ニ通ス所

池原村

中筋村　廣田郷の中條(スヂ)ニある村也支邑大戸初尾寛

寺

中條(スヂ)川　中筋の支邑大戸より出て宮村山添の納を經て
鮎谷(ヤ)川下流ニ入

初霜岩　同しく岩道の東の老楊樹下ニ季秋十二月朔
修ち粉を施すなりと云

不動菴　同村古佛行基作と云

鮎屋瀑

鮎屋村　鮎谷の轉文なるへし鮎ハ香魚なり和俗あゆと訓す

鱣谷(アイヤ)河　鮎屋の奥より瀑布を經て中筋大野の間をへて
海ニ至る

浅野瀧　鮎屋ニあり鮎屋の瀧と称し瀑布高さ二丈
石崖滑ニして飛泉雷響のことく跳躍る處陰々崖ニ
激る傍ニ不動閣あり瀑上の泉池廣く而して物聲ニ
もよはさるなるべし此世より新熊野と云前平村
而と此所ニ瀧の上ニ浅淵とふなる所あり此所の人浅淵
の瀧と称し傳る由其所集ニよれハ淡路ニ丹生瀬あり瀧
の上浅淵の離子のまきハあるを此にぞありとハ世处

此行　安永之撰集　別紀アリ

摂津の海をさて二里ばかり奥より出て見れは
紀伊の方の空より合ひぬ見えたり瀧上の淡路野島が崎
のまくらま求むる由もよし思ひけん思ひやる由あらはまし
あはれと見え渡るなる事を思ひ見人の心にはしとおもふほと
萬葉以下の古歌をとりてかけつゝ

萬葉集巻三羈旅哥

海若者 霊寸物香 淡路島 中尒立置而 白
わたつみは。あやしきものか。あはちしま。なかにたてをきて。しら
浪乎 伊与尒廻之 座待 月開 乃門從者 暮去者
なみと。いよにめくらし。ゐまちつき。あかしのとには。ゆふされは。

塩乎令満 明去者 塩乎干 塩左為能 浪乎
しほをみてしめ あされは しほをほさしめ ほさいのなみを
恐美淡路島 礒隠居而 何時鴨 此夜乃将明跡
かしこみ。あはちしま。いそかくれゐて いつしかも。このよのあけむと。
待從尒 寐乃不勝宿者 滝上乃浅野之雉 開
まつよりに。いのねられねは。たきのうへの。あさののきゝす。あけむ
蔵立動 良之率 児等 安倍而榜出牟 尒波母之
と立とよむらし。いさこども。あへてこきでむ。にはもし
頭氣師
づけし

尒波母云々
海和なり

摂津郷の海を去こと三里余り奥より右山里なれハ
その浦方の宮より八合をぬけてあり瀧上の淡路ハ野島崎
のあたりまで来て見わたせば思ひも寄らぬ景色あるべし
あたりを見るにつけても見る人の心にかなふとおもふほどは
万葉集以下の古歌をよせてかへつつ

万葉集巻三羈旅歌

海若者　霊寸物香　淡路島　中尓立置而　白
わたつみはあやしきものかあはぢしまなかにたてゝおきてしら
浪乎　伊与尓廻之　座待　月開乃門従者　暮去者
なみをいよにめぐらしゐまちつきあかしのとにはゆふされハ
塩乎令満　明去者　塩左為能浪乎
しほをみてしめあされはしほをほさしめしほさいのなみを
恐美　淡路島　礒隠居而　何時鴨　此夜乃将明跡
かしこみあはぢしまいそかくれゐていつしかもこのよのあけむと
待従尓　寐乃不勝宿者　滝上乃浅野之雉　開
まつよりにいのねかてねはたきのうへのあさののきゞすあけぬ
蔵立動　良之率　児等　安倍而榜出牟　尓波母之
としたちさはくらしいざこどもあへてこぎいでんにはもし
頭気師
づけし　尓波母云々海和なり

續後拾遺集春部　光明峯寺入道前摂政左大臣
岩そゝく音もとゝろし　滝乃上の御船の山の　かゝる
今朝や花さかり
同集　藤原隆祐朝臣　瀧の上の御船の山の
御船の峯にかすみてまさる
新拾遺集雑上　左兵衛督基氏　もみちはも
淺野の花をも隠すも浦にて見ゆるなり
新續古今集冬部　左大臣　風寒み吹くらむ
瀧の上の御船の峯にちる霰（アラレ）かな
同集　忠岑　よみ人しらす　吉野の花の雪かれと

名にたかき御船の山の...
夫木集　又現存六帖　同院左大臣　霜枯の御船の山の...
あみ...て瀧の上ゆく船人や誰
又　定家　藤えて...
御船の山に鐘子鳴るなり
草庵集　秋歌　野秋風　頓阿　藤...
滝の上の御船の露に秋風ぞふく
同集　兼好　...
句々　...あさの...
或説...の滝の...

いつの頃にや服坂氏を伐さうとて文ゆゑきれ村々
あらし里民の家々に古き浅野の滝のあさきを伝ふ
當村に留まれり　又其後山中瀧爲子　國民の名え
携さへくさせ出しと云なり

不動堂　同し滝の傍にあり不動像ハ弘法作と云
瀧名山清瀧寺と号す二十字石あり弘法作と云

蔵王祠　同し村二十四社の第一にあり

大泉寺　同し村真言宗　高野西南院末　弘法作之本尊と云　大泉ハ
深山にありて名高く

五郎墓　同し村瀧の奥寺の側にあり常ハ空屋形瑠川

一［附紙 別ニ委記アリ］御手害せられしと云浄院に記す御傍沼を見え三
人の墓あり

前平村　滝の上にあり

木戸村　城戸の佛文之沼山ハ鶴鼻古曲里につゞりしを
城戸庄ありしなるへし　此村出ハ樸（リヌキ）櫟林にて炭を出す
今新墾の田園となる

木戸新村

池田村

池内村

金屋村　金谷の佛文にや

けるに此人にや服部氏より伐されしと云文明の頃此村に
ありし里民の家に来りて此所の滝にあさましく死せり
宮殿に申して村民 又第四郎瀧名に 問答の家あり
持をうくさせて退てし云ふなり

不動堂　同し滝の傍にあり不動像ハ弘法作と云
満名山清瀧寺と号す二十字石あり弘法作と云

蔵王祠　同し村三十八社常にあり

大泉寺　同し村真言宗 高野西南院末 弘法作の釈迦仏と云 大泉ハ
瀑布によりて名つく

子服墓　同し村瀧の奥子の淵にあり当宮屋形細川
氏綱の為に害せられしと云疑院に記して侍従と云之
人の墓あり

前平村　滝の上東にあり

木戸村　城戸の昔文之治山ハ精鼻古墨につゞりて
城戸氏ありしなる 下此村名ハ楼欅(リヌキ)樹よりて岩と出せる
今新墾の田園となる

木戸新村

池田村

池内村

金屋村　金谷の昔文字や

金崖池　金崖にあり

新宮祠　同村にあり熊野新宮神を祭るならむ

東北山観音堂　同村にあり三十三所の第二なり東北
山千福寺の廃址にあり寺家は一乗院福蔵坊東坊
西方寺阿弥陀坊薬師坊すへて七坊みな廃て堂集
山の跡は金崖波岩は霊楽の跡なりしとぞ

観音寺　同村にあり真言宗にて和ちま 阿弥陀薬師地蔵大日像
阿弥陀仏

大野村

古駅　延喜式曰淡路国駅馬大野五疋

按するに郡の北駅路は広田大野より物部郷を
経て内膳に至る也今は大野を経て広田中津より
賀茂郷を経て物部に至り別之

白鳥社　大野にあり　按するに延喜式神名帳に白鳥社
ありて広田八幡の神を祭るなるへし

宝蓮寺　同村にあり真言宗 高野西南院末

宇原村　鮎原の枝郷なり

鮎原渓　前年池田の二ヶ所池内にあて合流し宇原より下
物部を経て物部河に入

香椎祠　宇原にある小祠也本社は筑前糟屋郡にあり

清水寺　同し村にあり真言宗大覚寺末
賀茂郷　和名抄津名郡賀茂　和名加毛
按するに今三原郡に隷す郷廃して今専ら加茂あり
下加茂村
鴨河　桑間川の下流下内膳上加茂下加茂とり宮山を
経て塩屋川と合流して海に入
賀茂祠　下加茂にあり
八幡祠　同し村にあり社領若干
上加茂村
宝泉寺　同しく真言宗大覚寺末
賀茂神社　上加茂にあり是なりしハ祈年国幣に預りし

延喜式曰津名郡賀茂神社
按するに今三原郡に隷す山城国賀茂舊記に謂所
天皇御宇六年降せ加茂の神田一処を定と肥後国記すといへり淡路
の加茂も神田のありし所にや賀茂神社ある事や本社ハ
山城愛宕郡上社ハ分雷神下社ハ御祖神
八幡宮　同し村にあり社領若干
松林寺　同し村にあり真言宗大覚寺末旧名西光寺
桑間村
桑間川　鉛屋川の下流桑間に至り加茂河に入鴨河あり
水源
下内膳村　先山乃麓にあり

按するに日本紀巻十五清寧紀曰白髪武廣国天皇
二年春二月天皇恨無子乃遣大伴室屋大連於
諸国置白髪部舎人白髪部膳夫白髪部靫負冀
垂遺跡令観於後とあり此比白髪部膳夫と云もの
所にて内膳と称するか

住吉社 下内膳柏森にあり三月十日村人稚児を撰頭
として奇麗すといふ又小田植の式あり或ハ獅子舞
楽ありとぞ獅子踊合にあり

盧光寺 同し村真言宗 仁和寺末

上内膳村 是も先山の山下にあり

蓮光寺 上内膳にあり真言宗 仁和寺末

牛王水 同し村先山の麓にある清泉なり旁霊泉と
いふ古へのしハ牛王堂ありしとそ

奥畑村 先山下にあり

白滝寺 同し村真言宗 先山末

あの修安坂三本田市京三村上下に跨れ

先山 賀茂郷の上方にあり東麓下内膳村より山に
登るこ十八町にして絶頂にあり其峯を三上岳
と称し三六郎先山の旧名なるべし

天地麗気記曰豊受大神自天降於淡路国三上

嶽二三十二神從之後遷丹波国与謝郡真井原宮
春秋二百九十万六千百七十年也倭姫命又移
坐之伊勢度遇宮
神代系圖曰伊弉諾尊淡路国三上社
按するに麗気記ハ弘法作といふ説あり釋文推説よ
大師の作の書目録ありて中神社を論する者一説
にも無しとそ知れハ此書ハ後世の浮屠習合の為作りて
空海の名を假りしなるべし然るに三上神社ありて
後来それ社地に佛寺を建しなるべし
千光寺　先山にあり真言宗三十三所の第一之其源院
此寺ある所にて承地寄附し給ひ　南源院殿の此時
諸堂再興し給ふといへハ本堂祖師堂経蔵鐘楼僧
房二王門等あり本堂本尊ハ酒出識摩寺本尊千手なる
弘法大師作不動明王澤みな古佛なり諸々祠二区一ハ伊弉諾
伊弉冊尊を祭る三上社なるべし一ハ天照太神八幡大神と
いふ山麓の諸村に門下のある十二区あり界内殺生禁断なり
むかしハ千光寺と称せしとそ舞楽乃法会あるとき参集
山の記するとなり
先山鐘銘　淡路国日本最初先山之鐘也云云
弘安六歳次癸未二月十八日鑄之　大工貞弘

本願主忍阿弥陀佛　當本願主別當忍聖
助成沙弥妙徳　比丘尼西阿弥陀佛
當国一乱之時此鐘既可下賣ハ定畢爰安宅秀興
買留奉寄進所也　永正十六己卯年六月
十五日
按するに弘安ハ後宇多院年号之鎌倉時代なり
大工貞弘ハ安性の冶工なるへし永正ハ後柏原院年号
京都義植将軍の時也當世一乱ハ三好氏より
時經安宅秀興ハ炬口城主なり
先山千光寺縁起畧ニ曰抑當山ハ開闢さりし事

伊弉諾伊弉冊尊天上より海底ニ大日の種子現
するを照覧して降り天浮橋に立て遥に是を
探り給ふ海の滴り凝て滴となれるをあつめ給ふ宮
に於て国に名付て淡路と云ふ其後人王百万歳の時外
宮豊受皇太神当山の東西二上嶽に移り玉ふ又大
眷属を率して五千五萬五千乃春秋を送て後仁徳帝ニ
遷給ふ于波吴岸にて役小角此初の法を修し給ふ
当峯ハ日域出現の最初にて清長定休の千手千
眼乃像なりし浦出現又南西山腰ニ岩戸あり三宮
此是安置ニ入定して並五三等の暁を待す其外

山中に岩屋の霊窟ありて岩屋ハ新にあらし阿弥陀仏南
無の倩に天然出現す阿釈不二の擬きなり東北山陽に
中泉流る浄池ありて曰異意其流れを汲て曰書写山性
上人灌頂受法の閼伽水に掬すとを是に延長元年
播磨国上野に為篠手と云猿長三丈余樹一丈許背に
篠生たり一人の猟師ありて足を射る猿是を負ひなから
南国机の海を渡り此山中に入て跡血流れて終に此
猟師跡をたつねきて此山中にて大血の留る所を見る大樹
の洞中に千手像あり光に射る所の矢胸間にたてり
猟師驚て此浄海を押へて彼矢を抜て幼子を折

誓を截て菩提浄心に帰し家忠と法名す此異説世
に満り延喜帝伽藍の宣下を彼国に申し家忠
勅許を蒙り千里の檀門を構て造る所の精舎ハ
金堂三重宝塔一重鐘楼講堂大経蔵食堂護摩
仁王堂諸守伊弉諾伊弉冊尊天照太神八幡三所熊野三
山白山金峯北野天神満山護法神等也延長八年二月十
八日認之千光寺縁起とあり　始中終省略
按するにあかちの国名の説ハ阿鉢字義なや古記に見えず
とれハとも其家の常譚怪しむに足らぬ或人いはく机
の海渡りし鹿ハ菱猪の様迹を追れ来を負ひ一体佛ハ

大山の牧敷に倣ひし地縁起乃説なれりと聞て思ふに机
の海ハ即妻鹿の牡鹿の魂留なり其故事ハ鹿か形の
像に記せり大山の像の説ハ神社考并に撰集抄を引て
曰伯耆大山明神ハ本地地蔵菩薩也昔有俊方者狩
此地多射鹿俊方常念地蔵宅内安像一日狩而帰
見像其所射鹿之矢皆中像俊方大驚悲自截髻捨
宅為寺禁殺生とあり又机の山中に猟師の誘倒せる
馬家あり思ふに播磨の海を馬にて徇せる家忍猟者ハ
千古獨歩の化人なるらめや世に安して有へき事にあらし
劍血に深むる血竹ハ湘君涙と假名すして瑕となせる

殊に奇しむへし中に就て東小山陽の泉と異なるは
る書寫山性空上人の開創なるに渡し縁起に記る元亨
釋書を按するに永延二年化人告曰播州有山曰書寫是
鷲嶺之一峰也性空到彼山創精藍号円教寺とあり先
山縁起ハ延長八年二月記とあり延長ハ醍醐天皇の暦号
之永延ハ一條天皇の年号也延長二年より凡六十年後に
永延二年性空上人書寫山を開くことを縁の知らく縁起に
書寫山の性空とあるしとなんや後世安昧の徒の寓偽
なり筆を作しらく知へし後人をして年紀の合すして疎謬なる
を参考せずして世ても嗤ふなれや何そ縁起を改作せさるや

又先山孫記ハ徽古記の筆備忘村備図ハ北畝主の蚤
と云説あり未た屢いまた考へ見書畫の賞鑒を能
せん人自ら知へし

未勘 能因歌枕云 あまろの社 めさしの社隣
いさやの社 衣のさと あくにの里 こ銭ちの池
梅すゝまいそやの杜ハ石屋神社の杜なるへしと或ちハ日内
まやめさしの隣 あくにの里 衣のさとハいまたこしらへ所とほす
山城名跡志曰新熊野所領諸国ニあり
院廰下 新熊野所目等云云當社領諸国庄園
貮拾捌箇所云云 淡路国三入庄
養和元年十二月八日
按するニ三入庄いまた其地を志らすに

書学源流考後

覇德ニ至移りて古を去ること日ニ遠し何れの時よりか輿地
の區域ヲ明らかにす式ハ於のころ源氏名を失ひ河上志筑
無等神となり大和神ハ諸冊二程ニ難り地紀の実を
乱し二嶋の山陵さへも守らず於悦浩然名區を遠ざ
る為なりしを修ての遠説を里巻に謹て傳ふるものハ王室
衰弱してより国史の職常事に廃退し割拠戦争の世と
隨て先王の紀綱地に擲れて其の修復照治の今に
及べり在の人其の流弊を憶ふへし治の今と見ず今の
世を見ると同物なるへし宝祚昇平復古の運ニ應じ

今の従弊を整ふ二者は八其の謬を率ゆひ浅陋
の氷を鑒つる可し其好古の癖ありて常に古誌を
採し一二の差謬を聴断して辨物の階梯となる需
浅の求め於閑を廻らす百紀娯の間好の士の癖陋
を没免す事程ニて傍年しめて学びん等に皆に自我
救諸を降して新得の遠ことを必の資料とするなら
し

隆井居更仲荘安雅書

當郡名所拾遺

此書再治乃添步見乃遺事を訂して刪補

乃料とす

○津名郡宮住村東の谷山名を石山といふ一本ニ明和六

年己丑二月山の半腹より方三尺許の石あり二つに石の裂

たる隙より水涌出て其高サ上る事五尺許にして溪中

へ落る事瀑布の如し安永七年に至りて其邊の里民

及ひ隣里携へ来りても靈泉とて汲去る人多し

水の甘キこと手悦兼て深るとそ

○土井村の濱より拾ふ右石ありと云石炭又ハ金紅の

すくみの類にや
○網者の支邑草香の海に天馬といふものあり海松の
如く乱髪の如く石花にも似たり腥気あり介類の類
海藻の苗ならん打く潮にかゝりて上る此品折傷に売
服すれば奇効あり
○農人橋　洲本内町外町の間の橋の名也
○洲本ハ播祠界内不在末社ハ　若宮社　高良社
天照神社　稲荷社　春日社　天満社　八王子社
恵比寿宮社あり　但し郷里の社中にある末社多くハ省
く是ハ府中の大社なれハ追加すへし

○江国寺内天満宮小祠あり鳥居より奥にし社地に此ちを
剣立なりと云
○龍宝院の山号ハ松林山　千福寺ハ玉光山　専称寺
ハ心念山 知恩院末 称名寺ハ護念山
○薬師堂　寺町にあり
○子安地蔵堂　寺町にあり　仏像ハ小野篁作と云　按ルに
篁遊冥府の說　釋書にあり　此像もいはれある事未考
○不智石佛の地ハ吸江寺の旧地にて礎石遺れり今
も吸江寺より其の旧地と崇敬すと云
○津田村の曲田山に小石窟あり俗に小穴と称す

古乃宮居乃跡なる処

○僧橋　鷲尾河の少流下物部村の出口にあり

○祇園社　少物部村亀谷山中にあり

○千草村猪鼻古塁の辺に古井あり井戸谷と称す
其の用水なるへし次郎か谷入道か平と云所あり次郎某
入道某の宅地跡なるへし

○猪鼻河内の奥に八道(ムサ)行成(トゲ)谷と云所ありて石面に
十六むさし盤といふものを彫たり樵夫なとの彫置て
休らひの戯(ナグサミ)とせしにや

○柏原山に今も杉壇番匠か谷の名ある八杉橋と
鋸(ヨカ)もし迷跡なるへし

○千草村に瑞崇跡堂あり本尊薬師の澤薬師と撰
造せし仏像なる処

○陀仏(ダブ)河　宮山村の渡間より出て炬口を経て洲
本川口より海に入ル此流に名號石とて南無阿弥陀仏
の字を彫たる石あり因て川(カハ)ノ名とすと云

○富農河　陀仏川下流

○炬口八幡祠に古鎧を蔵む俗に新田義貞の所
穿の物と云其似なるへし

○宮山村にある御霊社を俗に権五郎景政の社と云

傳ふ思ふりし關神と俗に五郎十郎と稱する訛なる
へし又大坂の関ノ神社を俗に御靈とも權五郎殿と
も云に同しき說

○安曇窟中に岩戸權現の外に少彦名社を崇る

○市原村松崇寺と平谷山と云村人の說に松
崇寺と宝峯山と稱して元つて宗先山のあると庚申
堂を平谷山と稱して天台宗四天王寺の末なるとすと云あ
山号あるなるへし

○志筑濱村の志筑神 社を 俗に田井の天神といふ又
申ノ宮と稱す毎年八月申ノ日祭る故に申宮と云とそ

○室津村の道傍に貝殼を數斗積たる所あり其處
とふ貝に似たり大サ八二寸許ありて大小もあり他の
貝ハ交らす此貝殼を圍上にも多し其辺の田
圃より掘出して積置るにや是元數百年以前
所にありしと云傳ふるし里人いへり其故を知る人も
なし 按るに淡州の山中に螺蛉の附たる岩あり
又多く武ハ石 石蛤の類もあり此所海中なりしにや
異やうの貝に似たる物を生しけるにや介虫とも石
とも分ちかたかるへし

○久我村常隆寺の谷中に血付りて枝葉あり

蚊竹あり先山の鹿の矢を負ひたる血にて染たる故と
出しけると云伝ふる俗説もあり
○あやめ池 仁井村にあり
○地蔵洞 為細村佛崎より赤岸といへる海岸
に窟あり其口狭くして奥は一丈許入る潮満れ
ば地蔵佛像を彫りたりといふ
○楢野村に門跡といふ所あり是は三腰細村の白楽
城門の跡なりしと云伝ふ
○新池 上八本村にあり
○小野々佐に兼應四年の印我にそへたり其塔といふ

より中八本と改したるにや未考
○大門池 馬廻村成相寺大門の側にあり大久保村の用
水とする池也本書にいふ五池と記せし大門池を是とすへし
○唐門堂森 急なる村にあり或説に唐僧来りて
信義を問對したる所の遺跡といへり此森の神を祭る時
野の郷合といふ事ありて村人会飲す其前日に会集して
明日の酒を醸る誰は大盃誰は小盃と論じて盃数を
定めし簿に記し翌日は酒を醸るよりもくこれを簿に記
を解して盃数の酒を飲しむ是を問行ての虚問對と
称すと云説もあり本田四郎に附布に佛事などありて

唐門と云ところ唐門堂のありし迹にて唐門堂と云
まやばん　或曰阿州田野ノ恩山寺　州金倉寺
淡州ノ山行寺右三箇所皆唐門堂アリト

○磯河池　野田村にあり

○福良浦縹渺ハ平敦盛を葬りし所より今も雨夜に
ハ笛の音あり渺に竹あり笛竹と称するなと云伝
謬説なるべし

○福井村の河岸の中に黒木と云木有り年々に
して根より生じたり枯もせず繁茂もなし擣おろして
水辺におけば毎年も枯る事なし日に帰りて八月

なるべ侍くに降け落る之水の色黒くして判定
てつんるに鉄力水の如躍ありて河すこし大キなるハ六
七尺もありてメツラしき物之河岸にオノツカ自らあり通せる
と里人拾ひとりて薪とするに良きありと云此物
所にある事といふ也

○福井村の高岸と云所に銅源となりありし枝繁
屈曲して己寿之往来の人見施して杯陰に暑を
避し名をつけとりとゝそきなるに枯とり

同村風呂の杯ノ
ひとも亦ありと云も枯とり

○真言宗に毎年十月に五日三時の法会ありて

経蔵の為輪年にこれを勤む其據ハ床下経蔵ハ寺
今ハ無る三寺と然も朽損せる より諸法華を發行し其附當若様
なるより法華の賀料を寄捨す常に至て太守
の法華ハ御發端に第十二代当若様守當新助に
讀立て毎年廻向するなり之間に掛るに志ある輩
野口氏の系図を細書に載せるに當若様守に法宗あ
り此ハなるへし新助も其族人なるへし又両神代
経蔵六寺の五月六日法華の表白の文ハ長安院宿
悟上人の作にて即上人の染筆なりと云傳ふ宿悟の
るハ本書にも記せり此僧北澤村西光寺の化褐

ありしと野口孫右衛門長宗より上人の才徳を選て
長安院の主に薦むるしめたるとなり長宗ハ即法宗の
子之哲夫六中の人也此源より西中の密寺に此法
會始りしなり

○廣田網村の岸北神社ハ年毎新明神の額を（納）
掛くるより解す之

○金津池　中節村にあり

○或曰鉄屋五兵衛網北氏の塚あると云傳ふ
在る澤嶋し捨てる村籠あり備の人に在所を問ふ
里人曰中節村の者毎年七月十四日ころには来て

灯籠を挑け此冢を祭る其故ハ網何氏歌よ
遊れ出し沖角より來るを匿しこれよと云里民
曰歌努某殺し後雑言と云るよ相手し其後の
さりしかハ卸何太守怒て此七代よ崇るへしと云
捨鼓屋山中よ大ひ自殺すそれより彼里民代
々悪瘡疾を患ひて今七代よ及へり聞て其の墓を祭
ると云宝暦初年の事也其後猿狸て見るに祭
りしる跡も無りき七代とありし悪を免れしやみハ
其家絶しるや知られと一文本古よ待也共は三
人の塚ありとあるを大将の塚馬の冢と云ありて

此云之三冢ハ有しとそ

○浦村よ繪堂と云地名あり堂ハ廃して有し其
堂よ藏せし古画二大幅今も村民共傳へし轉次
よ家ニ一旛掛りてこれを祭るとは謂ハ旅人の筆にや
初る人有し掛敬間よてもあるへきやと云掛しハ佛像
なるへし古き織物よて様北月すとそ判らへし

○此ハ西市なるよし洞度寺しと云説あり彼るよ理
聖像ありとそ　右二画査工　桂岩石りて後之

○由良城の下よ南海記をいひし表八句乃ま第一第
七頼向第八甘なるあり甘頼未遠なるへし

○同條ニ織田家譜ニ豊前守之虎実休と号す
一說ニ平治ニ之虎と号賢とあり
又之虎ともあり　虎ノ字康ノ字ノ紀元　追考へし
○大寺観音　箭二　箭三
○釜口村　此邊三ヶ所ニ流ともいふ　但支邑ニ上島　野田　小井ノ内
○小倉（ヲグラ）山　津名郡
○耳取山　長沢村
○窓ノ石　尾崎村の山岸ニあり窟あり　窓巌と開地
○膝行（ニジリ）松　同し所の東杜ニある大松の名
○柳ノ井　多賀村ニあり

○櫛笥（クシゲノ）社　同し村ニあり
○七ッ松　小山田村ニある一大木の名
○北立松　上堺村の路傍ニ有り
○高隈（クマ）山　上堺ニあり
○中田池　府中田村ニあり
○家形田池　安住寺村ニあり
○樽門ノ池　揚屋村ニあり
○乙倉山古壘　中城ノ古壘　上八木村本山の古
○壘[illegible]
○浦壁村ニ運形山円成院宮願寺ト云傳ル其廃地

二今瑞祥院アリ
○同村妙楽寺御堂表光寺ト云傳ル廃地ニモ今小庵アリ
○中ノ河内古塁迹○栗原ノ古城迹モ此村ニアリ
○西徹家集　渡ノ卯花　卯の花咲るあつちとあへて
えて渡あれはよふるせるも舟人
○或書ニ曰、相傳京師有二者一、曰滝野検校沢角検校 時代未考 共ニ善絃 嘗有著御曹子 源少名 与浄瑠璃 糸河矢作宿一遊舎女 恋慕之事跡谷十二段拍扇語之人挙習之於是四条東洞院彫金工家何某特絶品也且誘淡路傀儡舞木偶鼓三絃和之後

洲ニ業書後ナリ

陽成帝召於庭因任引曰淡路掾
○小倉山　津名郡ニアリ
○耳取山　長沢村
○窓石　尾崎村の山岸にあり窓数ありて窓穂と
呼きしとるなり
○猿渉松　同村の東社にある大松の名
○柳井　多賀村にあり
○松笛社　同村にあり
○七ッ松　小山田村にある一株の大木乃名
○壱本松　上堺村の路傍にあり

○高隈山　上堺にあり
○中田池　志筑中田村にあり
○家形田池　安坂村にあり
○梅川の池　掃守村にあり
○乙倉山古塁　中城山古塁　上八木横ノ木山の上
き処跡知るへし
○浦壁村に逆形山円成院　宮新なると云伝ふるを
慶光に今瑞祥院あり　同村下堂平光
寺と云伝ふる慶光寺も今小庵あり
○中ノ河内古城跡　へ粟原ノ古城跡は此村にあり

○浅野瀧　村にある初巻瀧ともいふへし　布より
浅野の地領にして思ふ所に寛永三年甲子の秋九
月初巻瀧と云ふ名まりしと石碑に記すめく
あり松南村の奥西濱と云ふ所の山中高さ不知程
登りゆく山に高瀧して居り瀧の高さ四丈あり
て石崖広く細流直下す瀧の傍に石剣の不動
安置す前に方丈許の庵室あり此亭にて雲斎了
る時読経請雨するにてある甚下の岩に此二折を
瀧の中流に入て山間の田に用水とすかいで採
集に瀧と植ふ中了初巻瀧とぞ名けるなるへし

これより浮島へ十町隔ありて松浦の宮居ら流るゝ
菁より泊舟の形あれハ万象をよせある瀧の上
の雅子他所を舟中の旅客常に遊て渡瀧
八州何よ変ずべしと思ふる布出て經歴の瀧を流
躍瀧と記せるを絵に写多象集以下の流る處
此外は後しても記せへ

淡路常磐草八本藩寫卒業ス原本誤脱頗多シ再
次校正稿其完キヲ得ガタシ他日善本ヲ得テ再訂ヲ俟ヽ

明治九年七月下浣

中邨元起

元起

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan